慕氏兵論

一編

三四

イ13
933
2

門 413
號 933
卷 2

慕氏兵論初編初級兵法卷三

曾田勇次郎　譯

大正十五年二月
花房與次郎氏寄贈

歩兵の初級兵法

第五十八章　歩兵の初級兵法ハ近年一大顕歩ヨ進ーかアいうんとかもハ進退旋轉の法をハ勢て之を單純ヨーて志クーてもこを晩近の軍ヨ試て以て充分かアとしてーけるの其進退旋轉の法ヨ極めけもハかア志うもとも旋條銃の一般かる用ひヨ就てハ此進退旋轉の法ヨ復ひ又或る變草を為さくるを得さる亟ーもこヨ就て

歩兵のおもに演習を重ねハ距離の増息と撒戰と野戰の從事とをこゝして土ユ兵の從事とゝおゐてそるを要を

進退旋轉の法ハ其施行法各兵の論載中細密ゝ開載そるもへゝ通常こゝを部署そるゝ如ゐ唯其一の開載を為を重ゐ而已ゝして其後此進退旋轉法の功利を判斷しをこゝしてこゝをいゝかる時期ゝ應用そるを要そるこゝを探索を重し其蘊奥の誓核ハ兵法の此他の學問の基礎ゝしてこゝを唯其自己の兵の演武書の蘊奥の學問ゝ

他の兵の演武書の淺畧尚尋常の理會を兼備を るとゐゝ而已ゝゐ功業のあらハを得るものかアとを

第五十九章　進退旋轉の法ハ之を分つゝ位置變換と正面變換とをこゝして陣法變換との進退旋轉の法ゝおゐてを

第六十章　歩兵の位置變換の進退旋轉の法ハい〔横列ゝ於る進行即戰列ゝての正面移陣〕此運動ハ單純ゝ見もるといへとをこゝをとをこゝを施行そること難しとをこゝして其難事

の増加せんこと横列の長さを以て通過を屢
ゝの距離を以て且地面の不齊を以ても
其運動を施行するハ唯短ゝ距離ゝて而已
適宜ゝ施さを得かゞたこのもとも不同の地形
ゝ於て歩兵を又此運動ゝ演習するハ甚肝要
のことかゞともろ　斜向移陣こも歩兵ゝ在てハさとへバ各
丁を旋回せしむるもペロトンスゝ或ヂビシ
ーンゝを旋回せしむるも八分一の回轉ゝ由
てかるかゞ

は〔縱列ゝての正面移陣〕若し敵の放砲を承ると
との過多からさるとゝゝハ横列ゝての正面移
陣ゝ超て此移陣を撰用もいゝんとかもハ甚長
ゝゝ隊列ゝ在て殊ゝ纔の難事もあることかく其
上敵の騎兵ゝ對て其戰備を保存ももハかゞこ
も多のバタイロンスを以てもるゝ或擺開距離
ゝて施行し或雙方ハ歩の距離ゝて施もたこのも
とも其ハ歩の距離ゝて行ふをハ敵の前ゝてハ
不可かゞともいゝんとかもハこも容易ゝ擾亂
しけもハかゞ敵の前ゝてもヂビシー距離を最

小距離かまとして考察するを要する
に側面移陣ハこれ単一ロッテンを以てし或重複
ロッテンを以てこれを為し得単一ロッテンを以て
するの方法ハてハ疲労し且これハ由て多くハ
距離を失へり重複ロッテンを以てするの方法ハ
てハよく目的ハ満足し且これハ由て容易く施
行するをえたこと多しとす
ほ〔背面移陣即反對せる正面を以て後面ハする
の移陣〕此移陣ハ之を横列ハおかても施行しかも
らひハ縦列ハおかても施行し得これを施行す

るハ静立して右轉背面向を為し或行進中
右轉背面向を為さしめて以てするかを
第六十一章　正面變換の進退旋轉の法ハ敵不
意ハ見ハるく方の脇側ハ正面を為さんと思ふ
と知ハ用ひ且總して正面を他の方向ハ致さん
と思ふと知ハ用ふ此進退旋轉の法ハ又運動の
際陣法變換と倶ハ兼行ハれを得てれを多のバタイ
ロンス若し横列中ハ在るとたハ毎ハ其バタ
イロンスハおかてする所かを
一バタイロンの小部隊たとへるコムパクニー

ンヨおかてハ此正面變換を施セヨロッテンを以て旋回および進入を為さしむるヨ由てしあるいは四半圓を通過セるを要セると紀ヨハ往返雙行を為さしめて以てしあるいは右轉背面向を為さしむるヨ由てこを施行し得

横列中ヨ在る一バタイロンの正面變換を為セヨハ先つ翼のペロトンスの一を新定方向ヨ布列し或正中の二ペロトンスを新定方向ヨ布列し次ヨ他のペロトンスヨ一分の旋回を為さしめ其後ペロトンスをして各異ヨ新定直線の方

ヨ行進せしむるヨよつてかるかを

後面ヨ正面變換セるヨハヘロトンスヨ右轉背面向を為さしむるヨ由てかるかを又こもと同しことを為セことあるこを新定正面線の前ヨ在る此ヘロトンスを以て正中ヨ正面變換を為セとなこもかを諸般のバタイロンスの一横列の正面を變換セるを要セると紀ヨハ其所ヨて正面變換のかる所のバタイロンを上ヨ記載せる方法ヨてこを為セ且自餘のバタイロンスを各異ヨ縦隊ヨ布陣し尋て方向の新定線の方

に行進して志こして其所にて横隊に張列せ此運動を敵に對向して施行するハ毎に危しとせ此故にこと多勢の撒兵陣に由て蔽護せらゝ且屢砲に由て蔽護せらるゝを要せ行軍中一の疎開縱隊の正面變換ハ最前の分隊を向面より變換せしめ且各次の分隊をして其同し地位にて逐次に同しことを為さしむるに由てせ

静立しさる一の密收縱隊の正面を變換するハ最前の分隊に從て運動を側面より為さしむるに由てせ行軍中斯るこことを為せるハ運動せ屈起軸心を迴て旋回せる運動に由てせ一の静立せる縱隊に於てせる正面變換若し半圓の半より多起に至ると起にそバタイロン先つ往返雙行を為せを要せ屈し

第六十二章　陣法變換の進退旋轉の法ハ最多くしてこゝに屬せるものハ　横隊の布列より縱隊の布列に至るの移轉と志こして反對して縱隊の布列に至るの移轉とコムパクニース縱隊の布陣と方陣の陣法

と梯陣の陣法と云うして棋陣の陣法とかて
横列中ゝ在るの一バタイロンゝ諸分隊の一齊
の旋出ゝ由て縦隊ゝ布列し得其バタイロン斯
ることを為し得るゝ又其分隊の一の後ゝ或前
ゝゝこゝを收斂そるゝ由てそ
縦隊若し其分隊の雙方の距離各分隊の正面幅
ゝ同しとゝ云ゝハこゝを名て疎開縦隊といひ若
し此距離分隊の正面幅の半ゝ至るとゝハ之を
名て半距離縦隊といひ云うして此距離六歩か
るとゝ云ゝハこゝを名て密收縦隊といふ

縦隊若し正中の兩分隊の後ゝ收斂そるとゝハ
こゝを名て正中縦隊といひ或又よく攻擊縦隊
といふ
横列ゝ列置せる諸般のバタイロンスを收斂し
て一團軍ゝ致さんと思ふとゝ云ゝハ此バタイロ
ン其所ゝて收斂のかる所のバタイロンスと云
このして通常の方法ゝて運動を施行そるのバタ
イロンとを除くの外側面よて縦隊ゝ布陣し且
云うるとゝ既ゝ縦列中ゝ在るバタイロンスの
後ゝ或前ゝゝ進退して八歩の距離ゝ至るこゝ云ゝ

もとよりやうに深き縦列は戰鬪の陣法として
は撰除せることなかるいりんとかもは其縦列敵
の放砲を承ること過多かもはかなるこゝて擺
開距離ゝ或チビシーン距離ゝよてのバタイロ
ンス縦隊をは戰鬪の陣法としてこもを撰用せ
ゝ

コムパクニース縦隊に於る陣法は一バタイロ
ンのコムパクニーン若しくは各異にセキチーンを
以て疎開縦隊に收斂して去こして其後此縦隊
自ら宛も別々かるバタイロンスかて如く

に運動せるとき如きかるかて
第六十三章　諸般の縦隊陣法の規矩に關係し
てはこもに就ては次下の事件に注目せ
ゝ
疎開縦隊はこも通常の行軍陣法かて此陣法に
在ては兵士の行進せるに最容易かてとも」こも
敵の及達の外に在るとき毎に之を用ふ此故に
戰鬪の陣法としては用ふることかし
半距離縦隊は敵の騎兵に攻擊せらもさること
の全く審ゝからに此故にこもに對て豫め其防

を為すを要すると雖尚運動するに密收縱隊に
おゐてするよりも多くの自由を好て屹と兵士
に惠むとなに之を用ふ
正中縱隊ハ眞の千變万化の縱隊にして右の
て又戰鬪縱隊かりとすいくんとかきハ此陣法
よりも擺開し得ること最速にして右の如して方陣
の陣法に移轉し得ること最疾なこのもへかり」右
翼密收縱隊ハ蓋しバタイロンの首のコムパク、
ニーと尾のコムハクニーとの撰拔コムハクニ
ーンかるとなにハ攻擊の正當の縱隊かりとす」

終にコムパクニース縱隊ハおもに藪蔭せるの
地形に供し且撒兵戰の基礎とかりて供用す
第六十四章　縱隊の布列よりして横隊の布列
に至るの移轉ハ最緊要かる進退旋轉の法の一
かりとすいくんとかきハこき繩の錯亂に乘し
て直に軍兵を攻擊せんこの為の所置を為さんと
する敵の近傍におゐて屢こきを為るを要すき
いかり
其移轉を為すに疎開縱隊におゐてハ分隊の旋
入に由てし右かして密收縱隊に在てハ擺開に

由てそ敵の前ゴてハ最前の分隊ゴ從て擺開を
るを便宜かアとそいクんとかきハ志このるとた
ゴハ時々點放を發せ〳〵め且運動の際士卒を〳〵
て背を敵ゴ背このさら〳〵め得きハかアこきと同く
ハ努て避る所とそ
一の縱隊たとへハ疎開縱隊ゴても半距離縱隊
ゴても或又全く密收縱隊ゴても前面と後面と
志こ〳〵て右側この或左側このとゴ戰列ゴ布陣〳〵得
志かきとも多のバタイロンスの密收縱隊ゴお
ゐて此運動をバタイロンスの陣法變換か〳〵ゴ

施行そるゴハ諸般のバタイロンス縱隊を擺開
そることかく横列中ゴ位置を取るやうゴそる
かア

第六十五章　方陣の陣法ハ騎兵の攻擊ゴ向て
歩兵の通常守禦の陣法かアとそこきと所謂實方
陣と虛方陣とゴかゐてそ實方陣ハ一の密收縱
隊よアこ〳〵て最尾の二分隊ゴ右轉背面向を為さ
志めて志こ〳〵て分隊の間際をハ正中よアこ取きと
る或るロテンゴ由てこきを充塞そるゴ由て成
るかアこゴ由て兼て或る腔際を得んこの為かア

空方陣即虛方陣ニおゐてハ各脇側班列の布列の度ニ從て二丁ゟ或三丁この深さを具有セ或分隊の重複しあるとき ハ四丁この或六丁ののの深さを具有セるかゟ我子ーデルランド國の軍旅ニおゐてハペロトンス距離の正中縱隊よゟて〳〵て方陣を布陣し或騎兵ニ對セるの縱隊よゟてこゝを布陣セ其縱隊ゟセキチー距離の子ビシー縱隊よゟ〳〵てセキチーンを重複せしめて右の〳〵て方陣ニ旋回せしむるものかゟ始の陣法ニおゐてハ其方陣二列かゟ右かして終の

陣法ニおゐてハ四列かゟこゝを撰用セ屈ゟとも第六十六章　梯陣の陣法ハ一横列のバタイロンスを〳〵て逐次ニ前面この或後面このニ移陣せしめて其バタイロンスの雙方定法の距離を具有セるニ至るとき ハ成るかゟ

第六十七章　祺陣の陣法を得るニハ一横列のバタイロンスよゟ〳〵て偶數この或奇數このバタイロンスを一齊ニ急進せしめ右かして定法の距離ニて止駐せしむるニ由てもこゝを其後奇數この或偶數このバタイロンスを〳〵て同しことを

為さしめたこのして前陣を通過してこゝと同し距離ゝ至らしめむゝ為かゞ且逐次ゝ此の如くそ

歩兵の此種々かる進退旋轉の法を精く捜索そるの以前ゝ結束せる班次ゝ於る歩兵の諸般の點放ゝ注目せんことを肝要かゞとそ亟しいうんとかゝきハこゝき其捜索と聯結そることと密かゝきハかゞ

第六十八章　歩兵の功力ハかもゝ其火兵をよく用ふるゝ在るかゞ晩近ゝおゐて其火兵ゝ致せるの大改革とたこのして射術演習ゝ費せるの配慮とゝ由て此兵の功力著く増加せゞたこのして旋條銃の一般かる用ひゝ由てハ尚此功力の増息せんこと甚しうるゝ亟し

第六十九章　結隊せる班次ゝおゐてそる歩兵の點放ハ

い　バタイロンス點放こゝきハ意外の功と強威の功との利を具有し其上こゝきを用ふるの正規時刻を撰定そることとバタイロンス指令官の掌中ゝ在るの利を具ふ此點放の害ハ裝

換の際拒扞かゐの形勢あゐて志このゝして一の
點放をも游兵ゐ保ゝさるゐ在るかゐ
バタイロンス點放ハ其正面の前蔽護せらる
ゝとゐ即不意ゐ伏兵よゐ一放を為ゝ其上直
ゐ銃槍を以て攻擊せんか為ゐ甚よくこゝを
用ひ得
ろ　半バタイロンス點放こゝハ繩ゐ強威の
功を具有ゐ志このゝとも點放の半ハ之を游兵
ゐ保つかゐ此點放ハ其正面の前の全く蔽護
せらゝさるとゐゐこゝを用ひ得ゐゝ

は逐次ペロトンス點放や或セキチー點放や
ハこゝを一縱隊の諸般の分隊ゐ由て逐次ゐ施
行ゐ爲ゐかゐ此點放ゐおゐてハ最前の分隊
點放ゝゝる後毎ゐ縱隊を緣て後面ゐ投ゐこ
ゝ其所ゐ再集ゝて銃を裝換せんか為かゐ此
點放を名て又よくこゝを隘地點放といふい
うんとかゝハ進むゐも退くゐも狹ゐ道路と
志このゝして狹ゐ堤坊とを緣て街路と志このゝして
隘地との戰鬪ゐこゝを用ふゝハかゐ
志このゝとも旋條銃ゐて客易く得るの良功を

ハ之を指令ヨリてもる此諸點放ヨリ就て得んか為のおもかる希望ハ沈着もるヨリあるかア」

故ヨリ此點放をハ虚色を以て屢こヨを演習もるを要モ」

各丁のよく照準し得んゝ為ヨリ指令ハ唯預令而已かるを要モ就中同し射發を為さむか為めこヨヨリ餘ア慎ミあるを要せバといへとも尚よくこヨヨリ後ヨさる亟けむか為ヨリ唯預令而已かるを要モ

ニ　ロッテン點放こヨハ實ヨリ一の意外の功を

も具有せさヨとも右このヨとも兵士ヨリ自由あらしむることハ此點放よく熟錬せるの歩兵ヨリ在て甚殘酷ヨリ在ア得亟ほとヨリ照准せんう為の自由あらしむるものかア」此點放ハ多分縱隊の擺開もるヨリ方て既ヨリ擺開しさる分隊ヨリ由て用ひたりして連綿さる點放戰ヨリ屢用ふ亟」此點放ハもハや掌令官の掌中ヨリ在らさるの害を具有して動モヨハ少しも功かなの發射ヨリハ陷らさヨとも右このヨとも騷鬧モるの發射ヨリ陷るの害を具有モこヨ全くなの

彈藥を無益に費やすものかなりとも
但班列點放此點放のバタイロンス點放に異
る所は指令の上にて各列別々に點放をるに
あるかなり是に由て一部分は常に游兵にあて
かこの強威かる點放を具有せり是故に又騎兵
に對て頗ることを命を爲ることも
第七十章　今歩兵の陣法を微細に記載して其
利害を解說するに移轉して至て得
其陣法に屬するものは横隊の布列と縱隊の布
列とを最初とす　エウロッパ洲に於る或軍旅に

かゐてはこれを二列に確定せ
三列の布列を撰用せ爲ることもの或二列の布列
を撰用せ爲ることのを爭論しけるに兩つかこの
ら其利害を具有せ我子ーデルランド國の軍旅
には今これを二列に治定せたりして火兵の
功の廣大なかる度に從て三列布列の撰者は其
判斷に反せ爲ること前知せ爲かなり又フラン
ス人は其晩近の軍におゐて二列を取せたこの
してこれに惡たを見さるし
横隊布列の利は火兵に最大かる功あるて霰彈

射の外に在るの其間ハ敵の點放に由てそるの敗亡を少しも大に為さゝるあるかと」其害此布列に在てハ運動し難くして敵の騎兵攻撃に對て纔も堅固からさるに在るかと

縱隊布列の利ハ其バタイロン狹小かる隙地を取る且こゝに由て敵の點放に對て容易く蔽護せらゝを得ると攻撃せんこの為に容易く運動し得且こゝに由て騎兵攻撃に向て堅固かるとに在るかと」其上此陣法ハ兵士をして自己に信任せしむることと多し且こゝに由て其整力を銃槍攻

撃に發成せ」其害ハ纔かる點放の功を具有したかして敵の放砲の及達中に在るとたに ハ多の敗亡を承く屈たにあるかと

此兩陣法の利害よりして今敵に向てこゝをいかかる時期に用ふるを要するものこを訓導せんこと容易かりとも守禦に在て蓋し前陣若し一の騎兵攻撃にも恐る屈くあらさるとたにハ横隊の布列を用ふ屈しいゝんとかゝハ其前陣此布列に在て其火兵の良功を希望し得ゝハかりと開濶平夷の地形に在て敵多の砲を具有そると

紀ゝも亦時とゝして横隊の布列ゝかゝわて攻撃を
るを要を爲ゝたゝるゝとも之ゝハ破格ゝ屬をる
とを
攻撃ゝハ縱隊の布列其多の運動力ゝ由て又蔽
蔭せるの地形ゝ適當をること屹と多ゝとをこ
をゝ撤兵を先進せゝむるとゝ紀ゝハ其强紀點放
ゝ由て銃槍を以てをるの攻撃ゝ準備せゝめ得
歩兵の戰鬪ゝ就て再ひ此ことゝ回到を爲ゝたる
このをハ今兩陣法の一をも拔擢ゝて撰用せをと
いへとも亦かをとも其用ひゝ就ての撰定ハ地

面の形勢と亦たゝて守禦ゝ所置をるを要をる
ゝ或攻撃ゝ所置をるを要をるゝのもやうとゝ
關係を爲紀ことを証據とゝて足をゝと為ゝ得
爲ゝ是故ゝ歩兵ハ一の陣法ゝて他の陣法ゝ移
轉をるゝ迅速端正ゝ施行をることゝよく熟錬
を爲紀ことを最緊要のものかゝとを
長紀横隊とからひゝ深紀縱隊とハ撰除をるこ
とかゝとを長紀横隊ハ運動ゝかゝ紀の外ゝ尚
其上改革せる火兵の為ゝ正面ゝも亦斜向ゝも
過大の命中を受ゝ深紀縱隊ハ大かる距離ゝて

同〳〵害を具有せること高紀照尺の故ゝ射發若〳〵纔ゝ平夷ゝ〳〵て即「射かるとゝ紀のこと紀ハ其功縱隊の深さと俱ゝ增加せるか」

其上斯の如紀縱隊ハ其深さ攻擊ゝあゐて當然の發射ゝ何の助けとかることかゝ紀の害あ「」若〳〵攻擊成就〳〵けるとゝ紀ゝハ縱隊の後尾殆と先頭の如く等く疲勞〳〵て得さる利ゝ就て加功を得んゝ為ゝハ餘ゝ遥ゝ遠離せるか「」一の敗軍ゝハ茲ゝ擾亂の發生せること速ゝ〳〵て忽〳〵て大かる敗亡を受ること其「」部屬バタイロンスの指令宜ハ實撿〳〵且もやうゝ從て所置せんゝ一の隙地もあること「」ワーテルロー地ゝ於るフランス國の攻擊縱隊と忽〳〵てタラクチル地ゝ於るリュス國の攻擊縱隊とハこもゝ為の証據ゝ

第七十二章　方陣ゝ關係せもハ虛方陣の利ハ多の火兵を戰鬪ゝ致〳〵遊兵と馬上オッヒシーレンとを包藏せんゝ為や或帶傷兵をいさゝらんか為やゝ多の腔隙を具有〳〵忽〳〵て砲兵の點放の破却ゝ對て露面〳〵あること纔かるゝ在

るかゝ」其害ハ敵の騎兵の射發ニ對て堅固かる
こと實方陣ニ劣ゝゝとゝかゝして茲ニ若し騎兵
の一さひ方陣ニ近よゝゝと起動ゝハ其脇側ニ
至極危險かる空隙の生し得るとニ在かゝ
實方陣のおもかる利ハ殆と敵の騎兵ニ突進せ
らる亟こらさるニ在ゝゝこのゝとともこゝゝニ反し
て纔の火兵を動作ニ致し敵の砲兵の點放ニ由
て多の敗亡を受く亟くして茲ニ方陣中ニ何も
包藏しあさハに尚帶傷兵をいさハゝあさハさ
るゝとニ一の腔隙をも具有せに此ニ

錯亂の發作もることと速かることあゝ
方陣の兩種の訓導せる利害よゝして騎兵對向
の守禦ニおゐてハ其方陣のおもかる功力を點
放ニ求めんと思ふと或堅壁の如く密收せる衆
勢ニ求めんと思ふとの度ニ從て虛方陣を撰用
もるこの或實方陣を撰用もるこのことハ明白か
ゝともゝ
ブロイセン國とリュス國とオーステンレーキ
國との軍旅ニハ實方陣を學則ニ擧くたこのるニ
フランス國とエンゲレス國との軍旅ニおゐて

ハ虚方陣ヨ撰定を讓ること明このかゝ實方陣ハ
エスリンケン地とワクラム地との野戰ヨおぬ
てゝ虚方陣ハアユエルスタト・地とおゝして
ワーテルロー地とヨおめてもるものヨして其
論說と其撰定との治定まてヨこを證し得
火兵の改革の後ハ其裁判虚方陣の利ヨ決せし
ことを取ヲ得若し崩生も亟紀空隙を充塞せん
この為と且劇く攻擊せらるく其脇側を强固せん
この為とヨ一の分隊を遊兵として方陣内ヨ處紀
しと紀ヨハ妹ヨ云ゥヲともも

虚方陣を以てもるの移陣ヨおぬてハ側面ヨロ
ッテンを重復せしむ亟し
第七十三章　一バタイロンよヲも多くよヲ聚
成せるの大方陣ハ極て忌むことかヲ此方陣ハ
單一かるバタイロンスの方陣よヲも絶て多の
守禦力を具ふることかしおゝして敵の一度衝
入もることあらんヨハ其大紀さいこヨ區別か
く各方陣多分ハ減さる諸般のバタイロンスを
以て別々の方陣を聚成もるハ甚宜しともも其方
陣ハ互ヨ循環相應援し得るものかヲこをヨ由

て尚ほ一の方陣若し隔絶せらるゝと却斯ることの自餘の方陣とハ絶て決定の感通あることかたの利ある所以なりとも此ことを為ヘレットかる者の斜方陣ハ不可かりとも此方陣ハ餘りに大造にして且餘りに精功に聚成せり其方陣を布陣するハ蓋し正中に布陣せる擺開距離にて互に比隣して布置せる或るバタイロンス縱隊をして各異に四十五度の正面變換を為さしめ去うして次に方陣を布陣せしむるに由てそこに由て一の方陣の脇側他の方陣の脇側

に正角に在り是故に其脇側互に防側を其四十五度の正面變換を敵の前にて施行せんに方陣の互に全く容易に射發を為ほとに充分細密に施行せんの為の難事あるの外に其方陣を以てもるの移陣ハ殆と為を為らさるとも去かもともフランス國の方陣敵の騎兵の間を貫行しつるヘリオホリス地とアユエルスタトヽ地と去うしてリユトセン地との野戰に於るの舊例ハ方陣の戰場にて移陣し得るを要もる而已を得さることを証もるものかり

第七十四章　時ニコームパクニース縦隊騎兵攻撃ニ對テ守禦セラルヲ要シ且方陣ニ布陣セラルヲ要セシ是ニ至テ第一のセキチーハ停立シ第二のセキチーハ右方ニ旋回シ第三のセキチーハ第二セキチーの右方のロットの地位ニ到テシまて前面ニ行進シたりして其處ニて左方ニ旋回セ第四のセキチーハ第三セキチーと第二セキチーとニ向て密收シ且右かるとき右轉背面向を為セかて

此單一かる方陣の陣法ハ大かる分隊ニも一やうニ應用セるものかてと為シ得ル

第七十五章　梯陣の陣法ハ軍兵を逐次ニ戰鬪ニ致セラ為ニ或彼此の翼を敵ニ避くるラ為ラと右ラシて又よく正面變換を為さんラ為ニのとの目的かて此陣法ハ敵を眞の攻擊所ニ惑ハセの利あて又此陣法ニ在て若シ茲ニ此の如く三筒のバタイロンス方陣を布陣セるとき右ニハ互ニ尚自由ニよく防側セるの方陣を布陣シせめ得右ラきとも梯陣餘テ近く一處ニ布置シあるとき右ニハ一部分よて恣ニ點放を盡セの充全か

る横隊を以てするの攻撃よりするも唯纔の變革而已を生ずるの害を具有す其方陣此害を脫せんか為に進退して大なる距離に在ると雖も各異に環翼せらるゝ為して敗北するの危險に臨むなり

第七十六章　棋陣の陣法は地形に就てよくこれを用ふると雖と定法の距離に在らざると雖とに退陣に或る利あるを以てこれを用ひ得此陣法は一部分を以ては點放に由て敵を拒みつゝ他の部分を退却せんか為に供するこゝとも

これを一齊に退却するゝけの時刻を二重に費すの害あり

リユス國のゲ子ラール官カフセウイッかる者は千八百十四年の戰役中エトケス地におゐて此陣法にて退陣を為しぬこれフロイセン國のケ子ラール官フランントトに從て演武場にてするの如くに施行しつるものなりとも此ケ子ラール宜これに由て絶て特別かる名譽なも得さるなり

第七十七章　コムパクニース縱隊に於る陣法

ハ甚多の利を合奏セたゝして後次の軍ヨおゐてハ改革セる火兵の用ひヨ由て又其陣法漸々多く用ひらるゑ亟」此陣法ヨ由てハ合併セる一バタイロンを以てセるよゑも多の地形を占領し且其土形ヨ就て助けを獲得ること合併せる一バタイロンを以てセるよゑも便利かゑとセ此陣法ハ彼此の翼を以てハ敵を攻撃しつゝ他の翼を退かしむることを為セこと容易かゑと「セ」部分々々ヨ進退したゝして諸般のコムバクニースス縦隊ヨ其互ヨ應援セるやうヨ斯の如ク布列を授與し得其上コムバクニース縦隊妹ヨ撒兵の使役と且總して蔽蔭せるの地形とヨ用ひらるゝ亟とヨ容易ヨ此縦隊よゑして撒布せる戰闘ヨ移轉し得

第七十八章　歩兵ヨ於る撒布せるの戰法ハ其初めアメリカ洲の自立國ヨおゐて大議の上ヨて用ひらセしものヨして草命の軍ヨフランス人其對敵を襲ハんこの為と「たゝして」こセを服さんこの為とヨ巧妙かる助けを得さゑ」其軍の際と其後とハ此戰法を又諸軍旅ヨ用ひさゑ亟たこの

て茲に一の野戰をも多く起ることなかく即こを
に由て歩兵の撒兵戰ハ大任に補せ〳〵其上フラ
ンス國の歩兵ハ尚巧妙に此戰術に上達しける
ことを毎にあらせ〳〵かて
全歩兵の一さひ旋條銃を具〳〵さらんにハ此兵
蔽蔭せるの地形を穿鑿せんこと尚以前よりも
多このる屢ねことハ希望を屢ねことにして尚又
こを由て撒兵戰多く決戰の一質を取る屢ね
ハ希望を屢ねことかてとを」アルマー地とイン
ケルマン地とおかしてタラクチル地とにて晩

近に在るの戰鬪ハ已に其徵候たてとを
出こるとねハ又唯撒兵コムパクニーン而已か
らハ諸の歩兵撒布せる戰法におゐて教諭せら
るゝことハ射的にかゐてもるを要もる如く同
くこを演習せんに此兩演習ハ歩兵の最緊要
かる演習に屬もるはとに盡く訓習せらをんこ
とを緊要のことかてとも
撒戰に就ての例則ハ撒布せる戰法の初級の部
分を訓習せむこの為に十分かるの法則を含有も
出るをこを屬もるものハ唯に訓習を論

定もること而已からにより撒兵を設備せんと思ふにあるかな

撒兵に在てハ判斷と伶利と右ゝして鋭敏かる智惠とを發作もることを大事かなともこゝ也此兵撒戰中に崩生し得るの諸もやうに就て自己に所置せんことを訓習せむこの為かな

撒兵其彈藥を費して是故に交代せらるゝを要もる者にハ耻辱に罰金を命せらるゝことをハ第一こゝを此兵に諭し此兵絶て殆とたしこのかる射發を具有せさるとにに十分點放し得さ

ることを諭もるしいろんとなるに合圖の點放ハ唯此兵の敵を命中し得るとにに其點放を用ひ得ること而已に歸もるものかゝ也ハかな

其他此兵已ゝを蔽護せんか為に諸の地形物をいかに用ふるを要もるゝ平地にて其姿制と運動とに由て敵の點放の功をいろに減却し得るかを此兵に教ゆ右ゝして兩の據拠してあるとにの撒兵陣地の利をこゝに示もるし

其他此兵種々かる地形物の守禦にあゆてハいろに所置もるを要もるゝ且其物体ハいろに攻

擊せらるゝかをこゝに教ゆるを要も

二筒の撒兵陣を互に對揚して動作せしめて以て其兵襲兵と伏兵とをいかに超らしめ得るゝ方ゝして自己に襲ハゝさらんこの為にハこゝをいかに防禦し得るこのを此兵に教ゆるを要も「環翼且擁環もる撒兵陣の利を此兵に知らしむると兼て自己に環翼せらゝさらむか為にハいこの為もを要もるこのをこゝに知らしむ亟」蔽蔭せる地形に在るの撒兵ハ雙方いこの連結中に在ゝ且互にいこの應援もるを要もるこの方こ

て守禦もるの陣地に窠穴しある敵の撒兵陣を窘に隔絶せんか為にハ定法の暗號にて二三ロテンの也にいこの集合もるこをこゝに教ゆ亟」一言におゆてもゝハ撒兵に教授もるの訓導ハ軍中此兵の要し得る所のものに就て正に思慮を得るゆとに此の如くに在るを要も

第七十九章　撒布せる戰法の利ハ僅の軍兵を以て大かる地形の滿面を警固し且是を以て敵の大軍を挑ミ得るにあゝて撒兵の點放ハ圍軍の點放よゝも却て多の功を具有し得るに在る

かゝいくんとかきハ撒兵ハ其運動ニおゐて團軍ニアリても自由ニしてたゞちして其射發ニ指令あることかゝ是故ニ其上こきニ由て敵陰をるの物体ニアリて助けを獲ることを得つゝ大ニ正く照準し得きハかゝ其害ハ此兵指揮官の指揮と注視とニ在ること結束せる布列ニ於るよりも少かゝとたゞして大半ハ其自己の判斷ニ委任せらるゝとニ在りてたゞして平地ニ在るの撒兵陣ハ絶て騎兵の攻擊ニ拒敵しあさハさるとニ在りとき是故ニ平地ニ在ていハ常ニ其陣の背ニ

後繼をる歩兵の助兵を加ふるの外ニ又尚騎兵一二ペロトンスをこきニ副加をるニ由て屢騎兵の攻擊ニ會軍を其ペロトンスをたかるとゝ紀繩かる騎兵の敵の攻擊を逐却せんことを謀業とをるものかゝこきを懈怠をるとゝ紀ニハ平地ニ在るの撒兵陣敵の騎兵ニ由て迫脇せらる、と紀毎ニ結束の布列ニ移轉せさるを得ゝこきニ由て撒兵ハ疲勞せらきて たゞして終ニ其射發不慥ニかるものかゝ

慕氏兵論第一編初級兵法卷二畢

慕氏兵論第一編初級兵法卷四

曾田勇次郎　譯

騎兵の初級兵法

第八十章　騎兵の初級兵法ハたとへ或る箇條によおゐて異かることとあるといへとも右かもとも歩兵の初級兵法と一やうかること多しとも此兵ハ歩兵の如く同く結隊せる班次と撒布せる班次とを具有せ結隊せる班次を區別せるに横隊布列と縱隊布列とによおゐても

第八十一章　騎兵の進退旋轉の法ハ尚歩兵の

進退旋轉の法よりも單純かるを要そること多
しとそいへんとかきハ此兵の施行せるの速度
擾亂を發作し得ることと甚易そけきハかり敵の
前ゝて施行せる諸の進退旋轉の法ハ轉倒して
こきを為し得るを要ハ右ゝして騎兵ハてきゝ
上達そるの高度を具ふるを要そ
第八十二章　兵法の一元たるエスカトロンそ
通常四ペロトンスゝ區別そ或ゝ記者そエスカ
トロンゝ第五のペロトンを加へ或レギメント
ゝ第五のエスカトロンを加ふ右ゝのるとそハて

きを撒布せるの戰鬪ゝハ除そて右ゝして前哨の
從事ゝ定まきるかるを要し是故ゝ火兵を具そる
を要そ
第八十三章　緊行ハ進退旋轉の法ゝおかてそ
るの尋常行歩ゝ用ひ馳行ハ多分進退旋轉の法
ゝ抽てたる速度かりきして急馳行ハ唯攻伐
ゝおかて而已こきを用ふ
第八十四章　茲ゝ復ひ又かもかる進退旋轉の
法の或るものを記載し右ゝして其後此進退旋
轉の法を特ゝいかる時期ゝ應用そるを要そ

るこのを判斷し且探索を屈し

第八十五章　騎兵に於る位置變換の進退旋轉の法

い〔横列におゐてもする正面移陣〕此運動騎兵に在てハ歩兵に於るよりも却て多く緊要のものかりとせいりんとかもハ此兵ハ其攻擊を殆と全く此陣法におゐて施行するもへかり

正面移陣を施行するに若し多のエスカトロンスに由てもると却にハ茲にエスカトロンスの間に隙地あるを要も此隙地ハ諸般の記

者ことを開載もるに四歩より十二歩に至る我子ーデルランド國の軍旅におゐてハこと

に十二歩を取りて

ろ横列に擺開もるの距離にてエスカトロンス縱隊におゐてもする移陣ハ殊に騎兵の運動せんに斯ることを擺開して為もことあるハさるゆとに惡た地形と蔽蔭せるの地形とに

て運動もるを要もする時と志ゝして攻擊の為に屹と疾く張列し得るを要もる時とに應用もるものかりとせい

は斜向移陣にもいハ各丁をゝて八分一の回轉を為さゝむるゝ由てこの或よく分隊を以てもるゝハペロトンスゝ八分一の回轉を施さゝむるゝ由て成るかもに側面移陣ハこもを施もゝ或る軍旅ゝおぬてハ三騎つゝを以てゝ他の軍旅ゝ在てハ四騎つゝを以てと二騎つゝを以てとゝてこもを施行もゝ我子ーデルランド國の軍旅ゝてハ四騎つゝと二騎つゝとの方陣を取もゝ

ほ縦列ゝおぬてもるの移陣歩兵の如く同く

騎兵も亦諸般かる縦隊の陣法を具有もゝ殊ゝ進退旋轉の法ゝ注目も置たものハ其一距離を以てもるの縦隊こもハ半エスカトロンスこの或ペロトンスこを正面ゝ具有もゝ半エスカトロンスの時期ゝハ雙方の距離十八歩を以てもペロトンスの時期ゝおぬてハ六歩を以ても

其二疎開縦隊ハ毎ゝ正面ゝエスカトロンスを以てゝてゝ雙方の距離五十六歩を以てハ

其三密收縱隊ハ正面ニエスカトロンスを以て〳〵ちゝして雙方の距離十二歩を以ても其四エスカトロンス縱隊こもレギメントの各エスカトロン自己ニ一縱隊を布陣もるニ其縱隊擺開間隙を保つゝあるひもやうの度ニ從てこもを變革もるこちゝして布陣もるかエ

へ背面移陣こもを為もニも三騎つゝろ或四騎つゝゝの基礎分隊を以て右轉背面向う或左轉背面向ゝを為し或よくペロトンスを以て右轉背面向ゝ或左轉背面向このを為もかエ

第八十六章　横列ニおゐてもる正面變換の進退旋轉の法單一のエスカトロンニ在ても旋回ニ由て〳〵多のエスカトロンスニおゐてハ歩兵ニ於る如く同く翼のエスカトロンスの一ニ從てこの或正中の一エスカトロンニ從てか施行もエ其處ニて正面變換のかるを要もる處のエスカトロンスも新定方向ニ旋回ハ自餘のエスカトロンスも若〳〵こもを斜向の正面變換かるとハニハ横列中ニ在るを要もるの地位ニ到エ〳〵まてハ

正く前面ニ行進し且ちうるとゐ各異ニ旋回を」
正角の正面變換ニ在てハ其處ニて正面變換の
からさる所のエスカトロンスをペロトンスを
將てそるの旋回ニ由て右方ニ或左方かニ縱列
中ニ到テ新定線ニ從て行進しちゝして其所ニ
て前面ゝ或背面向このニ戰列中ニ張列を
一縱列の正面變換ハ逐次ニ旋回を施行そるニ
由て成るかテ
一の密收縱隊ニ就てハ最前の分隊ハ位置ニて
旋回しちこして他の諸分隊ハ先つペロトンス

を以て右方この或左方このニ縱隊ニ旋回しかくの
如く新定方向の方ニ行進しちゝして其所ニて
旋回そるニ由て復ひエスカトロンニ布陣を
第八十七章　騎兵ニ於る陣法變換の進退旋轉
の法ハ横隊の布列よテして縱隊の布列ニ至る
の移轉とちゝして反對ニ縱隊の布置よテして
横隊の布置ニ至るの移轉とをおもかテとを
右方ゝ或左方かニ縱隊ニ布列そるのをペロト
ンスこの半エスカトロンスこの或全エスカトロン
スこのを以てそるの旋回ニ由て成かテ

一の密收縱隊を布陣するにハ同時の正面變換を以てか或ことをかしにか布陣し得たとへハ第一のエスカトロンスに從て右方に密收縱隊を布置せんこの為と且是故に此陣法に移轉するを右方正面變換と兼行ハんこの為とにレギメントもエスカトロンスを以て右方に縱隊に旋回をさゝして第一のエスカトロンを旋回の後駐立せるのに自餘のエスカトロンスを密收してペロトンヽ距離に至るこゝに反して同時の正面變換かく密收縱隊を

布陣せんにハ其處にて縱隊の布陣せらるゝ所のエスカトロンを停立し他のエスカトロンスを上に謂ふ所のエスカトロンの右側ろ或左側ろに在る度に從て左方ろ或右方うにペロトンスを以て縱隊に旋回を此エスカトロンスをかたの如く前ろ或後かに到りて右ろして其先進エスカトロンよりペロトン距離に到りて且旋回に由て再ひエスカトロンスに布陣を縱隊の布列よりして横隊の布列に至るの移轉ハ旋回に由てか或擺開に由てか成るかを

第八十八章　横隊に於るの布列は多の隙地を取るの利とこゝに由て陣地の弱き部分を蔽護するの利と多の劍戟を戰鬪に致すの利と最疾く運動せしむるの利とありて敵の放砲を受くること最少く左かくとも霰彈射の功の外に在る際は敵の放砲を受くること最少きの利とを具有す其害の方は側面の拒扞かきと地形の運動に便宜かること稀かりとありて横隊の布列に於る騎兵は敵の眼目に遁れ得ること稀きかるとに在りともありとも之を暴の襲ひに發向せしむるは屹と便利かりとも横隊に於る正面移陣のおもかる希望は行歩の同等とよき連級とありて十分かる肅靜とに在るかり

第八十九章　横隊におかねてもる攻擊は間隙（エンムラエルレ）かくも間隙を以ても梯陣におかねても或棋陣におかねても成り得

第九十章　間隙かき横隊に於てもるの攻擊は騎兵の多くのオッピシーレン全くこれを撰除もいうんとかきはこれを擾亂の生し得ること甚易

けをいかゞ千七百五十九年ミンテン地の野戰其證たる舊例かゞ為らるもこをゝ反して騎兵の暫時を成就しつるの最赫然たる攻擊即千七百四十五年ホーヘンフリートヘルク地ゝおゝてゼヲラール官ホンケスレルかる者の攻擊ハ此陣法ゝおゝて施行せらをしことをおもひ為らして七年間の軍ゝおゝて暉然たる戰勝ハ此陣法ゝ於る騎兵ゝ由て戰鬪せらをけることを思ふ

此例の新ゝ証をる所の戰勝ハ兵法の陣法ゝ歸をることと稀をゝして尚よく軍兵の勇氣と指揮官の方寸とゝ歸をるかゞ

第九十一章　間隙を以てをる横隊ゝての攻擊

ハ上の攻擊ゝ超て運動の甚容易く成るの利とエスカトロンスの一ゝ發作しゝ得るの雜沓およひ擾亂の他のエスカトロンスゝ波及せさるの利を具有し其他環翼せらをゝ得かたくして且環翼しゝ得易き所の大かる正面幅を取るの利を具有しゝ為らして終ゝ地形の小かる障碍を避け得るの利を具有をゝ反して充全横隊の撰者

ハ此間隙ニ由テ纔ノ劍戟ヲ攻擊ニ致モト此故ニ攻擊ノ纔モ强威カラサルトエスカトロンスノ側面ノ危險ニ臨むヒを嫌忌モ」たうもヒも總シテ間隙を以テノ横隊ニ於テ撰定を歸セヒ間隙を以テ横隊ニ於るノ攻擊ハ其横隊對敵ノ横隊ヨリモ大カるトキハ或即少モ均くあるトキハこのニハ敵ノ騎兵ニ對テ用ひ又戰列ノ班次ニ備ふるノ歩兵ニ對テ用ふ・騎兵ニ對モるニハ其横隊毎ニ遊兵ニ由テ後繼せらるゝを要モ」歩兵ニ向ふニハ其歩兵騎兵ニ由テ應援せらきさるとキハニハ遊兵を欠キ得

第九十二章　梯陣ニ於テモるノ攻擊ハ諸軍兵を露面モることカく敵ノ横隊ノ諸部位ニ攻擊を為シ得るノ利と諸般ノ部位を一時ニ迫脅モるニ由テ其眞ノ校計を隱シ得るノ利と全横隊を布陣モるを要モることカく便宜ノ時節ニ由テ攻伐シ得るノ地ニ在るノ利とカラシテ此陣法ニ在テハ斜向攻擊や或正面變換やを為シ得るニ容易カるノ利とを具有モ」其害ハ翼ノ梯陣ノ過多ニ孤立モると是故ニ多勢ノ敵ノ騎士ニ

向てハ他の梯陣の救ひ來て得るの前に過力を以て攻撃せらるゝ時ハ敗北するの急險に臨むゝあるなり」此害を除くゝ側面の防禦に供し且是故に守側兵或蔽側兵と名目せるの或るペロトンスを縱隊におかめて翼の梯陣の背に後繼せしむるゝ由てこゝを除こんことを務めけり

其同し配慮ハ横隊に於る攻撃にも亦宜しかるべしいゝんとかゝるハ側面ハ又横隊におかぬても最弱の部分かゝるハかり」ハ味方の側面を

蔽護するゝ適當する而已からず尚又兼て敵の側面を不意に攻撃するゝ此蔽側兵特に適當せるとも

梯陣の同勢と其雙方の距離とハ異なることゝ甚し其同勢ハ地形の延挺と敵の同勢とかし て攻撃兵の校計とゝ關係も最纔の梯陣幅ハ一エスカトロンの幅かなるとも」雙方の距離ハ復ひ地形と注目するの目的とゝ關係し又梯陣の同勢に關係を及ぼすハ多分ハ此距離五十歩に至るかなり」梯陣の陣法ハ守禦の布列におかぬても亦

攻撃の布列ニおゐてもハ巧者かる騎兵のオッピシ
ーレンこゝを撰定セ就中三百エルゥ乃至ハ四
百エルゥよりも多からさるの間隙を以てモ即
攻撃ニハ最遠ヒ距離を以てモ
第九十三章　棋陣の陣法ハ唯横隊ニおゐて前
面ニ赴くと地形ニ由てゥ或附屬モる軍兵
ニ由てゥ隊を斷つニ已を得さるとヒと成
る而已
此時期ニ在てハ偶數ゥ或奇數ゥのエスカトロ
ンスゥ攻撃セよといふ指令ニて尚横隊ニおゐ

て攻撃の成るやうニ十六歩ゥ乃至ハ二十歩ゥ
後ニ在るか」棋陣ニおゐてモるの攻伐ハ尚動
きハ退陣ニ就てゥ或騎兵若し戰闘を決戰迫ニ
致モを欲セさるヒかきとも右ゥきとも左ゥきとこゝニ
由て時刻を得んことを努めぬるとヒこゝニ成し
ぬるか」ゼ子ラール官ブリッセかる者の騎兵
ヂビシーゥイユテルホック地ニて千八百十三
年の軍ニ此陣法ニおゐて幸福かる攻撃を為し
ぬ右ゥして過力かる敵の騎兵ニ由て退陣モる
ニ已を得さるしとヒこゝニ同く幸福かる退陣を為

しぬ

第九十四章　騎兵ハ縱隊の陣法ハ總して此陣法ハ在て運動せんこの為と其眞の同勢を隱さんこの為とハ供ハ此陣法ハ横隊の布列よりも善くこれハ適當せりとせ其上時としてハ攻撃ハも供せ

縱隊ハおのてそるの攻撃ハ英氣を發しぬるの利を具有せ且是故ハ或る利を以て歩兵ハ對てこれを用ひ得たりとも此攻撃ハ毎ハ唯劍戟の纔かる數而已を戰鬪ハ致せの害と其縱隊敵

の砲兵の放砲ハ由て大かる敗亡を受け得るの害とたりして錯亂ハ陷りて易紀の害とを具有せたりとも遠く展眸しあるさるこの如紀甚霧深紀天氣ハおのてハ時として横隊ハての攻撃ハ超てエスカトロンスを以てそるの疎開縱隊この或密收縱隊このハおのてそるの攻撃を撰ふ在紀ことくに

第九十五章　騎兵ハ就てそるの撒布せる戰法ハ撒兵戰と掠郷ハ於る攻撃とハ在りとせ撒兵戰ハハ通常各エスカトロンの第一ペロト

ンこの或第四のペロトンこのを定む若し一のペロトン撒戰せんか為め進發せると紀ヨハ其ペロトンの半をレギメントをさること三百歩か乃至ハ四百歩このゴして撒布し右ゴして其他の半を助兵とかて撒兵陣の後百五十歩ヨ後繼せ一レギメントヨハ十分ヨあるの一エスカトロンを差撥せると紀ヨハ二ペロトンスを撒布し其他のペロトンスを復ひ助兵とかて後繼せるかて

點放せるヨハ騎士毎ヨ駐立して騎銃を用ふると紀ハ馬を半右方ヨ回轉し拳銃を以て射發せると紀ヨハ馬を半左方ヨ回轉るせを要せ」歩兵ヨ對て撒戰せると紀ヨハ騎士點放しあるを要せそといへとも若ろもとも短兵を以て攻擊せるを要せ」總して騎兵の撒兵ヨ於る點放の功ハ告諭せ亟からさるとも」此兵ヨて撒戰せるハかもヨ唯攻伐の前ヨ地形を監察せんこの為と背後ヨ在る軍兵の運動を隱さんこの為と敵を挑まんこの為と右ゴして妹ヨハ結隊せる騎兵攻擊の撒兵ヨ由てかやうヨ准備せらるゝ程ヨ敵の歩兵

を不時の點放ゝ偽引かんこの為とゝ供もる而已

第九十六章　掠郷ゝ於る攻撃ハ大抵各エスカトロンの兩翼のペロトンスゝ由て成るかゞいこんとかゞきハ結隊せるの遊兵を副手ゝ保つて

との毎ゝ必要かゞきハかゞて

其攻撃ゝ臨てハ騎士撒布せるの班次ゝおゐて且短兵と最大の猛烈とを以て敵ゝ溢るくかゞ」

茲ゝ注目せる攻撃ハ敵を容易く錯亂ゝ致もの利を具有もといへとも右々きとも こきゝ反て此攻撃纔の連綴を具有もるの大害と右ゝ

て騎士の全く自己ゝ委任せらるくの大害とを具有もゞ此攻撃ハ平地ゝ備ふる敵の歩兵の撒兵ゝ對てと敗北せるか或錯亂せるゝの敵ゝ向て

と結隊せるの攻撃ゝ不的當かる地形ゝてと點放戰ゝ由て撒せらきさる賤紀歩兵ゝ向てと左かくとも若し隊列ゝおゐて斯ることを為もて

との叶ハさるもやうのと紀と右ゝして砲兵ゝ向てとゝ用ふるを要もゞ右ゝきともコサツケンの如く不作法かる騎兵ゝ向てハ決して用ふるを要せもいゝんとかゞきハ此兵種ハ此戰法ゝ抽

でありて其多の熟錬をかやうに用ふ可けきハかぞ」こきに八輕騎兵をおもかぞとそ其輕騎兵ハ此攻擊の法を用ふるものにしてたとへハ我子ーデルランド國の胸甲騎兵も亦千八百三十年ロイク地におゐて斯ることを為しつるといへとも賤紀歩兵に對てハ輕騎兵をおもかぞとそ

第九十七章　騎兵ハ横隊の布列と縱隊の布列とありて輕騎兵に八撒布せるの戰法とからてハ他の戰鬪法の一をも具有そることなしたゐ

うきとも輕騎兵ハ下馬して此彼の地形の部位をたとへハ隘地を守禦そるを要そること時として生そ是ゐ為に此兵旋條騎銃を具したるとき紀に八首尾よく用ひらき得ゐし

方陣の陣法ハゼ子ラール官ホン　ヒスマルクかる者千八百十二年におゐて不作法かるリュス國の騎兵に對て首尾よく用ひつるものにして破格に屬そ此陣法ハ守禦の法かぞとそ且騎兵に在てハ毎に攻擊に注目そるを要そ

、砲兵の初級兵法

第九十八章　砲兵の初級兵法ハ他の兵の初級兵法よりも單純なること多しいうんとかきハ此兵絶て同齋の歩法を以ても尚整列を以ても要用とせに進退旋轉の法におぬてハ一の轉倒よも支へにくうして砲間の正に距離に拘ハらさきハかり

エウロッハ洲の軍旅に於る野砲兵の砲器の口徑ハ異りあること甚し：六ポンド地砲と八ポンド地砲と九ホンド地砲と十二ホンド地砲とを具有せるうして又或る軍旅にハ十八ポンド地

砲を携輸せ其他リュス人の一角砲と名目せる種々かる口徑の中砲と平天砲と獸獸にて携輸せるの山用砲とうして火箭砲隊とあるかせ總して晩近におわてハ纔の口徑を取るに由て軽便かることの得らるくたけにおわて輕野砲に回到しけりいうんとかきハ此野砲實に多の運動力を具ふきハかり出うきとも重に砲種に對せるの戰鬪にハ此野砲こきに長伏せにんハある爲このらせ方今鑽開せるを以て重に口徑を軽く為し且簡便かることに由て砲車を軽く為

もを務め且是に由て十分かる運動力を具有もるの大かる口徑を戰野に携輸せんう為の疑惑を解こんことを務む

ちうもとも旋條砲器の用ひ復ひこきに變革を致さんことハ勢て容易かりとも

第九十九章　砲隊の聚成ハ諸の軍旅に於て同しことにあらハちうもとも大槩皆方今一砲隊に八砲を備へ其内二砲ハ多分中砲かり

リュス人にも十二砲器より聚成せるの砲隊あり ちうして爰に又十二ポンドの騎砲兵の砲隊

を具有もちうもとも此騎砲兵の砲隊も我子ーデルランド國の軍旅にも亦斯の如く具りあるものかりちうこのろにフランス人ハ此口徑の砲隊をハ十二ポンドの榴彈地砲からてハ他のものを携輸せさるかり

第百章　攻擊もるの軍に毎砲の彈藥に就て砲隊に要用かるものを算もるに・十二ポンドの地砲に百五十發と六ポンドの地砲に二百發とちうして十五ドイムの中砲に百二十發とも我子ーデルランド國の砲兵にハ方今毎砲隊の

彈藥を會計するに野砲兵の各十二ホンド地砲の砲隊にハ實彈三百四十二と榴彈八十八と燃彈十二と霰彈百五十二とかたちして榴霰彈百五十二とかたちを野砲兵の各六ホンド地砲の砲隊にハ實彈五百二十八と榴彈百十六と燃彈十二と霰彈二百零四とかたちして榴霰彈二百零四とかたちを騎砲兵の各十二ホンド地砲の砲隊にも實彈四百三十四と霰彈百三十六とかたちして榴霰彈百三十六とかたちを騎砲兵の各六ポンド地砲の砲隊にも實彈六百六十六と霰彈百八十とかたちして榴霰彈百八十とかたちを十五ドイム中砲の砲隊にも野砲兵において榴彈三百十と燃彈四十二と霰彈百五十二とかたちして榴霰彈百五十二とかたちを且騎砲兵に在ては榴彈二百八十二と燃彈三十八と霰彈百三十六とかたちして榴霰彈百三十六かたちを

第百一章　砲隊を區分するに我プーデルランド國の軍旅にハ二の半砲隊にかたちして各半砲隊を二の四半砲隊に分つ

砲兵の諸發行にハ一の四半砲隊よりも少かた

ものを取らさるを確定の規則なりとも

第百二章　砲隊ハ砲の連接して輓馬の敵の方に對向してあるとき ハ戰列の班次に在りとも

も砲の離脱して砲口の敵の方に對向してある

とき ハ砲列の班次にありとも

砲列の班次に進むに方て前車ハ砲より八歩の

距離に退却し砲間の雙方の距離ハ二十歩を通

常なりとも右の場合に十歩迄に減却し得たり

して四十歩の乃至ハ五十歩の迄增息し得

砲列に進むに方て砲の整列してあるを要用とせ

ハ各砲の指令官ときに便宜の陣地を撰出せ

合併せるの二砲隊をこれを名てデビシーとい

ふ此デビシーに一員のホーフドオッヒシールこ

れを指揮し戰列の班次に於る此二砲隊の間隙

ハ三十歩に至るとも

第百三章　砲兵の進退旋轉の法ハ他の兵の進

退旋轉の法のごとく同く位置變換と正面變換

とに分て陣法變換との進退旋轉の法に分て

ありとも

第百四章　位置變換の進退旋轉の法ハ正面移

陣と各砲の八分一の回轉に由てゝ或全砲隊の旋回せる運動に由てゝ成て得るの斜向移陣と砲を以てゝ四半砲隊を以てう或半砲隊を以てう成て得たゝして側面移陣と背面移陣とにおゝて成るかて

第百五章　正面變換の進退旋轉の法は一砲隊に由ては毎に翼の一に從て成るかてこを為せに翼の砲を新定向方に致したゝして自餘の砲を斜向移陣に由て新定線の方に行る多の砲隊におゝては四半砲隊を以て縱隊に布列し

たゝるとき方向の新定線の方に行進し且其處にて前面ゝ或後面かに戰列に布陣せ

第百六章　陣法變換の進退旋轉の法はおもに横隊の布列よてして縱隊の布列に至るの移轉とたゝして反對に縱隊の布列よてして横隊の布列に至るの移轉とにおゝて成るとも四半砲隊を以てせるの旋回に由て右方の或左方かに縱隊に到て或毎砲の或四半砲隊のを以て翼の一の或善く正中のよて前面の或後面の に離進得

第百七章　砲を以てするの縦隊ハ唯行軍縦隊而已に供す

四半砲隊を以てする密收縦隊ハ右方の四半砲隊この或左方の四半砲隊この に從て布陣し或正中の砲に從て後面に布陣し得たりとすると雖四半砲隊ハ後面に要用なる距離を得てたゝして正角に縦隊に退く正中縦隊ハ毎に密收してあるか「ゆ」擺開するハ旋回によりてこの或斜向行進に由てこの成るかゆ

第百八章　梯陣の陣法ハ騎砲兵の用ふること

多し「各梯陣にハ別して半砲隊よりも少なを取ることかし」

第百九章　砲兵の棋陣の陣法も静立する半を「して點放せしむるの目的かゆたかる際に餘の半ハ退却するこの或前面に進むかに在るかゆ」諸般の分隊茲に殆と大なる間隙を具有するを要すこと点點放の動作を妨けさるこの為かゆ

第百十章　他の兵の如く同く砲兵も亦其結隊せる戦法と撒布せる戦法とを具有す」結隊せる戦法にかゝてハ砲隊其全部にかゝて合併して

あるがゝして若し三箇以上の砲隊を同し點放線に合集して用ふるときは斯るものを名て砲兵團軍といゝ撒布せるの戰法は砲隊の部隊各自己に同し目的に向て從事しあるときは成るかゝ

結隊せる戰法の利は砲隊指令官其自己の判斷に隨て點放を規律し彈丸の種類を定則し且功を實檢し得るにあゝことに反して砲に用ふる繩も便宜なる蔽護あらゝ藥煙永く砲にかくゝあゝて志こして見ることを妨く且敵を大なる命中の機を具有せゝ撒布せる戰法は復ひよきは四半砲隊指令官を希望せゝ此指令官は砲隊指令官の胸中にて所置せることを知る者を要せゝ

第百十一章　砲兵に就て用ふるの點放せゝ

い〔砲點放〕此點放は四半砲隊指令官の指令にて砲隊の翼一に始まゝ志ゝして間歇かく砲隊の他翼の方に至るかゝこゝときは若し大なる距離にて點放せゝを要し且是故に尚命中の機の少かきと或若し茲に點放を永く保たんゝ為に他の曲折の發生せゝとときかに

適當も
ろ〔四半砲隊點放〕各四半砲隊自已より右方の
砲を以て始めつゝ點放をし此點放ハ殆と強威
りあるとゝして通常暫時の地砲射よりおぬて
中等距離より施行せも
は〔急點砲〕此點放よりおぬてハ各砲自已より點
放しゝゝして常よりゝ方向の注意を以て務
て疾速より點放をしこゝハ唯敵近くより在てゝこの
して甚輙く射發せらゝを得ると雖ども照
星射の及達よりあるの攻擊縱隊より向てとゝこう

して霰彈點放より就てと甚輙く射らゝを得ると
雖ども而已こゝを用ふ
に〔砲隊點放〕砲隊指令官の指令よりて諸砲一
齊より點放をし此點放ハもやうより由て又半砲隊
點放より分さゝを得
此點放を用ふることと甚稀ゝなるを若し或る
物体を速より强て毀滅せしめんと思ふと雖ども
或數多の射發を一齊より發して以て敵を射撃
めんと思ふとハこのより用ひ得

慕氏兵論第第一編初級兵法卷四　初編終

早稲田大学図書館
011888006984